

謂之乞巧奠六日之夕兒女題詩於楮葉及彩牋繫竹枝懸燈毬數十囁呼至鴨河投之因亦以六日之夕爲七夕荆楚歲時記曰七月七日爲牽牛織女聚會之夜○中略香祖筆記曰七夕之說自三代以相沿舊矣宋太平興國中詔以七日爲七夕著之甲令而其後多以六日爲七夕名七夕而用六不知起于何時右見異聞錄按東京夢華錄初六初七晚貴家多結綵縷于庭謂之乞巧樓則當時初六初七兩日皆可乞巧遂相沿而不察耳然今並無初六爲七夕之說言鈞曰古書皆以七月七日之夕爲七夕今北人卽以七月六日之夕爲七夕思之未得其說當詢其所自琅邪代醉編曰遇月三七日不食酒肉蓋重道教之故而七夕改北俗用六日太平興國三年七月乙酉詔曰七夕改用六日宜以七日爲七夕頒行天下蓋方其改用六日之時始於朝廷故釐正之自朝廷始錄詳

〔古今和歌集秋〕なぬかの日の夜よめる

七夕にかしつる絲の打はへて年のをながく戀やわたらむ

〔夫木和歌抄七夕〕寶治二年百首乞巧奠

見るまゝに庭のともし火かすかにて七夕祭る夜は更にけり

寶治二年百首乞巧奠

しら露の玉のをごとの手向して庭にかゝぐる秋のともし火

〔年中行事歌合〕十九番左持乞巧奠七月七日

七夕にけふは手向る琴の緒のたえぬや秋のちぎりなるらん

〔宗長手記下〕大永六年七月略中七夕に法衣かし奉とて

法にあふ二の星のかり衣けふのえにてや思ひはなれん今日の法衣を借衣にて二星ともに萬年の業をつくしはて侍れかしといふこゝろなり

〔延喜式三十一〕七月七日織女祭